

# 女子教育の場における就職指導

## The Guidance of Getting a Job for the Students of Women's Colleges

角 智津子 水 原 道 子  
SUMI Chizuko MIZUHARA Michiko

### 1. はじめに

大手前女子学園は、本年創立50周年を迎えた。女子の就職超氷河期といわれる昨今において、幸いにも大手前女子学園としての長い歴史と、教職員はじめ卒業生の方々の努力によって、全国平均を上回る就職率を維持している。しかしながら、停滞しつづける景気や社会状況を考慮すると、まだまだ女子学生に対する求人状況には厳しいものが考えられる。

そこで、就職希望者及び内定者を対象に、アンケート調査を行い、女子学生が就職活動に関してどのような不安を抱き、どのような情報やアドバイスを求めているのかを分析することと、関係各方面のデータを調べることにより、今後の就職指導に対するスタンスを考える参考としたい。

### 2. 学生の意識調査

#### 2-1 調査方法の概要

本稿の基礎資料として、就職を希望する女子学生の就職活動に対する意識をアンケート調査し、現状把握の一翼とした。

##### (1)調査対象

大手前女子大学・女子短期大学と大手前ビジネス学院専門学校に在学中の530名の学生を対象とした。

##### (2)調査時期

1995年7月～1995年12月

##### (3)調査方法

就職活動中及び就職内定者に対し別紙アンケート用紙による集団自記方式によって即時回収を行った。

## 2-2 調査の分析結果

アンケートの各項目について、対象とした学生の現況と就職活動の実体を分析した。

### (1) 調査対象者の基本属性

#### ① 学歴及び専攻

対象者のプロフィールを基礎情報として分析すると、4年制大学336名、短期大学148名、専門学校46名となっている。（表1）

表1 専攻学科

	文学系	経営系	秘書系	語学系	無回答	情報系	家政系
四年制大学	322	1	0	10	3	0	0
短期大学	1	128	18	0	1	0	0
専門学校	0	0	46	0	0	0	0

専攻学科別にみると、文学系が323名と回答者の61%占め、続いて経営系が129名24%となり、秘書系が64名12%となっている。（図1）

#### ② 居住環境

これらの対象者のうち、現在自宅から通学しているのは、4年制においては233名で69%、短期大学では118名80%、専門学校では44名96%に達している。（図2）

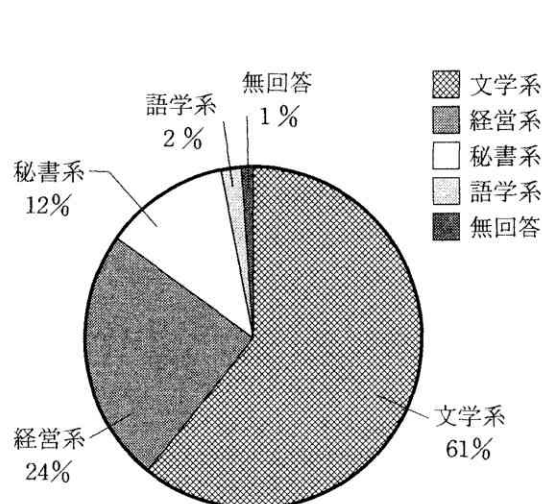


図1 専攻学科について

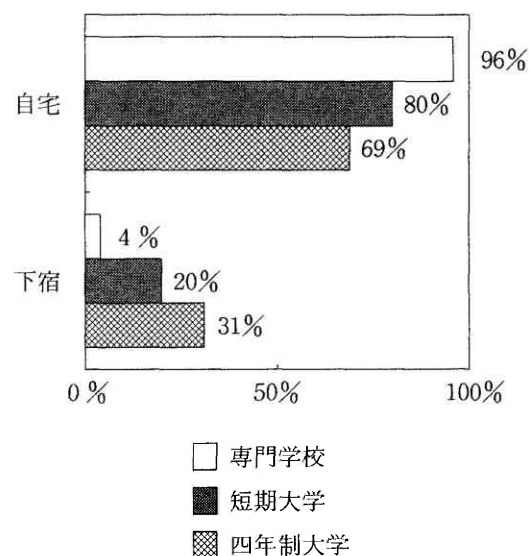


図2 居住状況

この数字からみると、女子学生においては自宅通学が大半を占め、その数字は4年制より2年制のほうがより高くなっている。

短期高等機関に学ぶ学生のほうが自宅通学者が多いという結果である。これは同じ高等教育といえども、大学進学者と短期大学、専門学校進学者とのひとつの特性として考えられる。つまり、進学時点における本人及び周辺の進学意識や将来構想などにおいての差異が、多少なりとも影響していると思われる。ひいてはこの意識の延長として、就職時における姿勢にも4年制学生と短期大学、専門学校生との差異として現れてくる。

### ③アルバイト経験

アルバイト経験について、大学生93.1%、短期大学生94.5%、専門学校生95.6%が経験している。従事している職務形態別にみると大学、短期大学、専門学校生とも圧倒的にサービス業が多く、短期大学に至ってはアルバイト中の91%がサービス業に従事している。これはサービス業に従事する労働力の不足を物語るとともに短期労働力で不足をまかない新卒定期採用を抑える現況につながる。（表2、図3）

表2 アルバイト経験について

	事務	サービス	経験なし	その他
四年制大学	60	236	23	7
短期大学	6	138	8	0
専門学校	7	42	2	0

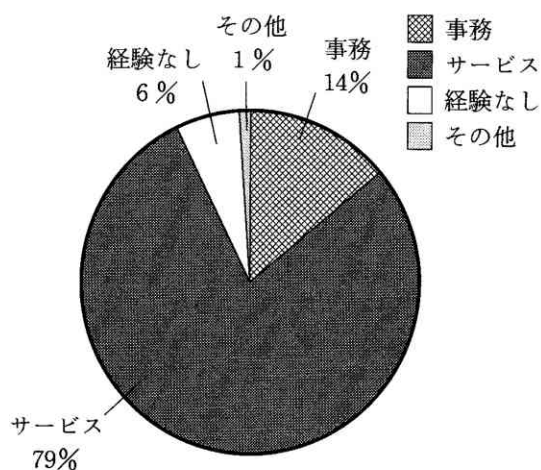


図3 アルバイト経験について

### ④資格取得状況

現在取得している資格について、級別を問わず、取得状況を分析した。

何らかの資格を取得しているものは、4年生大学において70%、短期大学98.6%、専門学校95.6%となっている。（表3）

表3 現在お持ちの資格数

	9個	8個	7個	6個	5個	4個	3個	2個	1個	0個	有資格
四年制大学	0	0	0	0	0	7	27	68	135	99	70.5%
短期大学	1	2	5	19	33	32	43	8	3	2	98.6%
専門学校	0	0	1	4	3	14	13	5	4	2	95.7%

## 女子教育の場における就職指導

共通して最も多く取得しているのは英検で、平均すると42%の取得率となる。続いて多いのが秘書検定となる。（表4、図4）

表4 資格取得状況

	秘書	ビジネス文書	ペン字・書道	ワープロ	簿記	タイプ	情報処理	英語	TOEIC	TOEFL	珠算
四年制大学	53	3	48	18	0	0	1	180	1	4	63
短期大学	126	114	35	32	124	5	27	74	1	0	79
専門学校	31	4	7	22	31	0	41	10	0	1	10

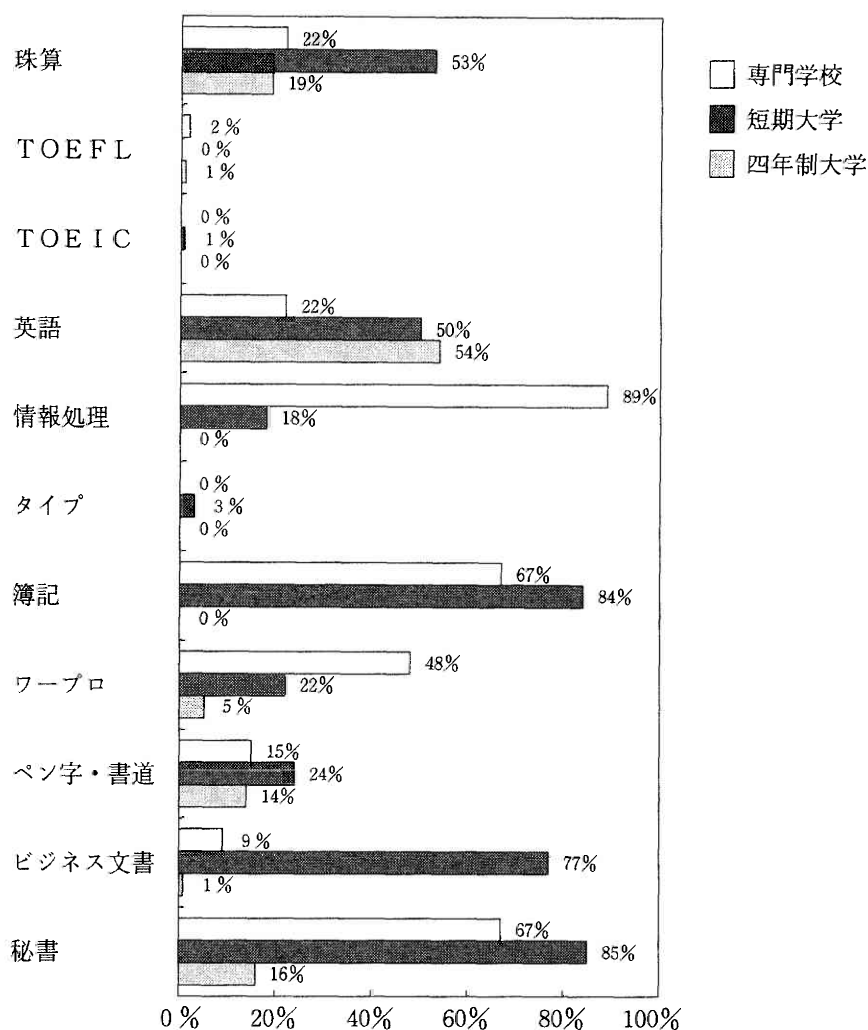


図4 資格取得状況

## ⑤その他

調査対象者のうち、既に就職活動を経験した兄弟姉妹の存在についてもデータを集め、体験者が身近にいるかどうかによる不安感等の相違についてみる。（図5）

大学がやや少ないものの短期大学、専門学校いずれも約半数の学生の兄弟姉妹が就業している。つまり家庭内では、半数の人が就職戦線を垣間見ていることになる。

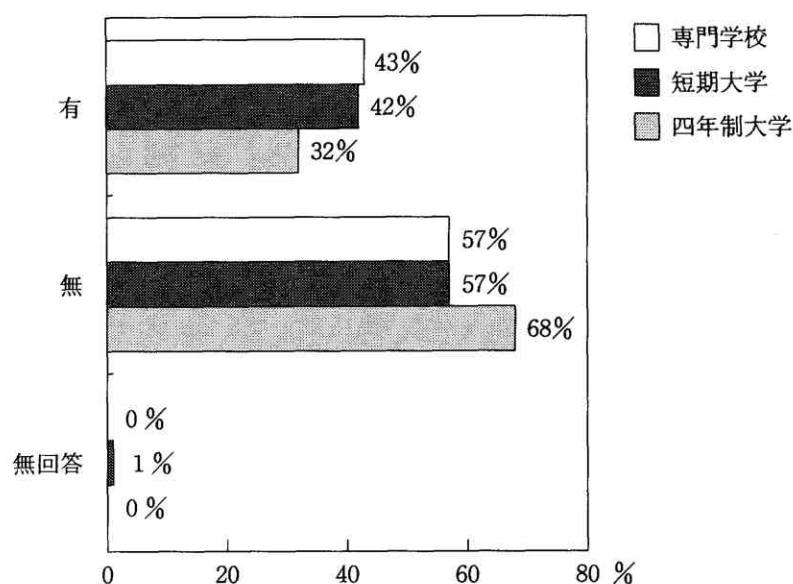


図5 就職を経験済みの兄弟姉妹について

## (2)就職指導への要望

調査対象者が就職活動を行うにあたって、どのような情報を得たいと考えているのかを分析した。

### ①就職活動の方法・内容

採用試験にむけて不安を抱いているなかで試験内容を具体的に知りたいと希望している。

(図6)

70%の大学生が就職活動を行う手順、つまりどのようにして活動すべきかという基本を知りたいとしている。これは、短期大学や専門学校が比較的少人数単位で教職員のガイダンスを受け、かなり依存した形で活動を行うこととの精神的差異が数字として現れていると思われる。いいかえれば、大学生は自立した活動を行わなければならないと自覚するとともに、未知への不安も大きく抱いているのである。

特徴的なことは、短期大学生はどの項目に関しても平均的に知りたいと思い、特に面接試験に強い関心を抱いている。大学生は、受験以前の活動に不安を抱き、就職活動そのものの情報・知識を得たいと熱望している。そして、実際の試験内容には不安が少ないという結果となっている。これは現在の女子学生の採用試験の形態に負うところが大きい。

つまり、学校推薦や学校への求人票を中心に動く短期大学生と、自己開拓中心にならざるを得ない大学生との相違である。一方、専門学校生はいずれの項目も低く、就職活動そのものへの意欲・関心の低さを現している。

### ②指導を受けたい知識

就職活動を行うにあたり、しっかりと身につけておきたいと考える知識に関しては、そ

## 女子教育の場における就職指導

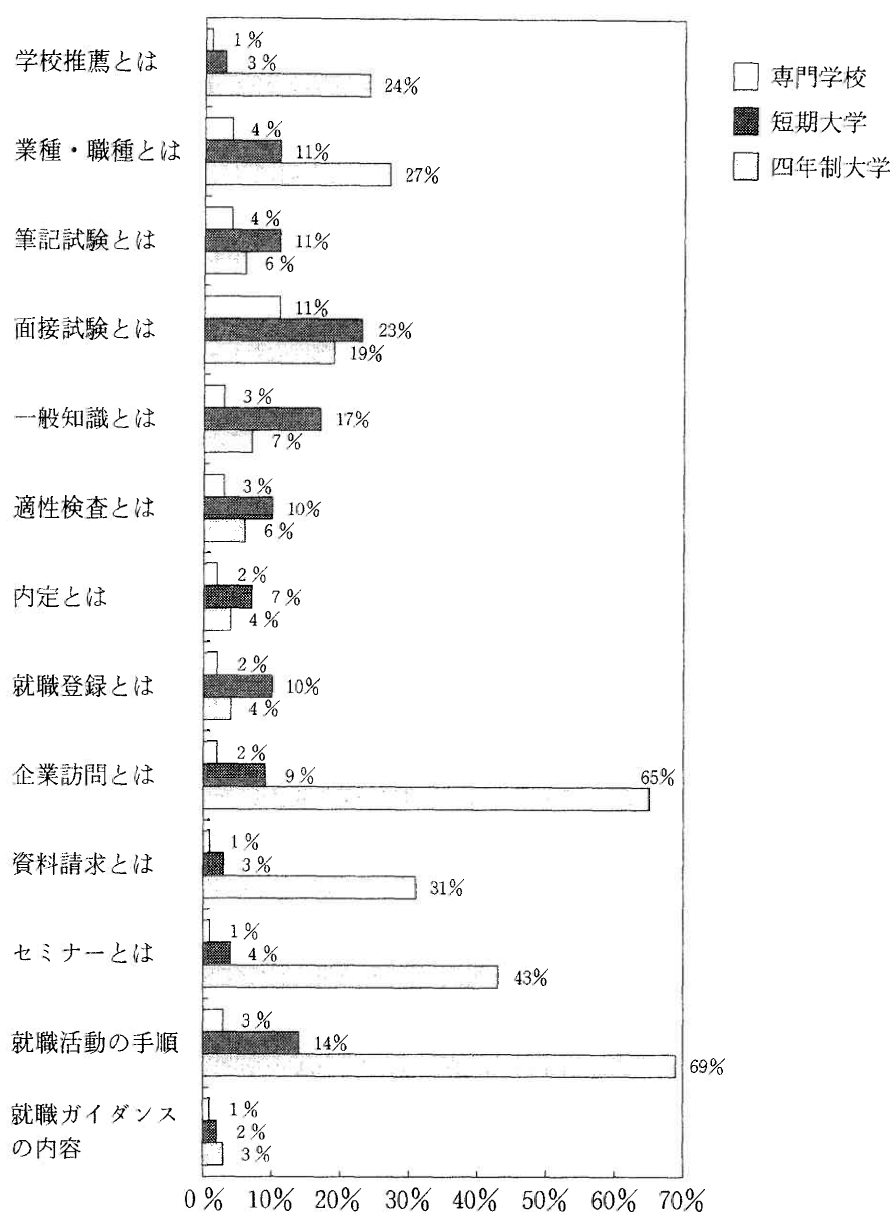


図6 知りたい就職活動情報と知識

れぞれ大学、短期大学、専門学校の学業内容による影響が反映した結果となっている。  
(図7)

つまり、日頃からレポート、論文作成に慣れている大学生は、論作文の書き方にはある程度の知識と自信を持っているが、専門学校生は最も知りたいと思う知識なのである。実に80%が、論作文に対して不安を抱いているのである。逆に、日頃実務教育を多く受けている専門学校生は、企業への電話の掛け方や、手紙の書き方にはあまり不安がなく、教養・研究センターの大学生は、これらの実務的行動に不安を抱いている。短期大学生の関心は、ここでも面接に片寄り、66%が面接シュミレーションを受けたいと希望している。

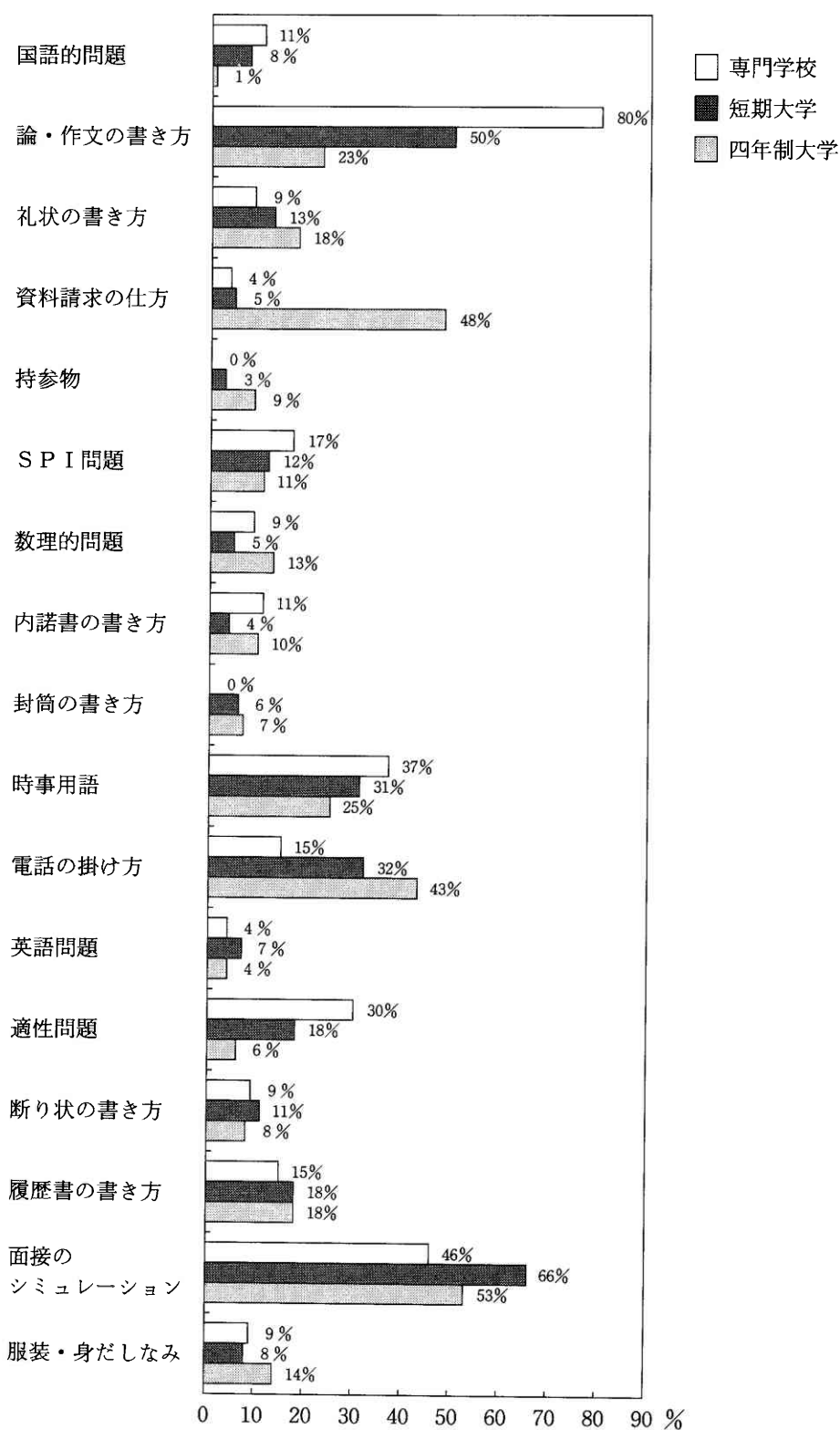


図 7 指導を希望する就職知識

## 女子教育の場における就職指導

共通して指導を希望しているのは第1位に面接シュミレーションで46%から66%と高い割合となっている。第2位は電話の掛け方、続いて時事用語の解説、論作文の書き方、履歴書の書き方となる。

調査対象者のみならず、学生の多くは「面接を制するものが就職試験を制す」と信じており、その面接を異常に重要視していることが、このデータでも裏付けされた。

## ③面接シュミレーションについて

前記データで知りたい情報・知識の第1位となった面接シュミレーションのうち、どのようなことに不安があるのか、いいかえると、どのようなことを知りたいのかを尋ねてみた。(図8)

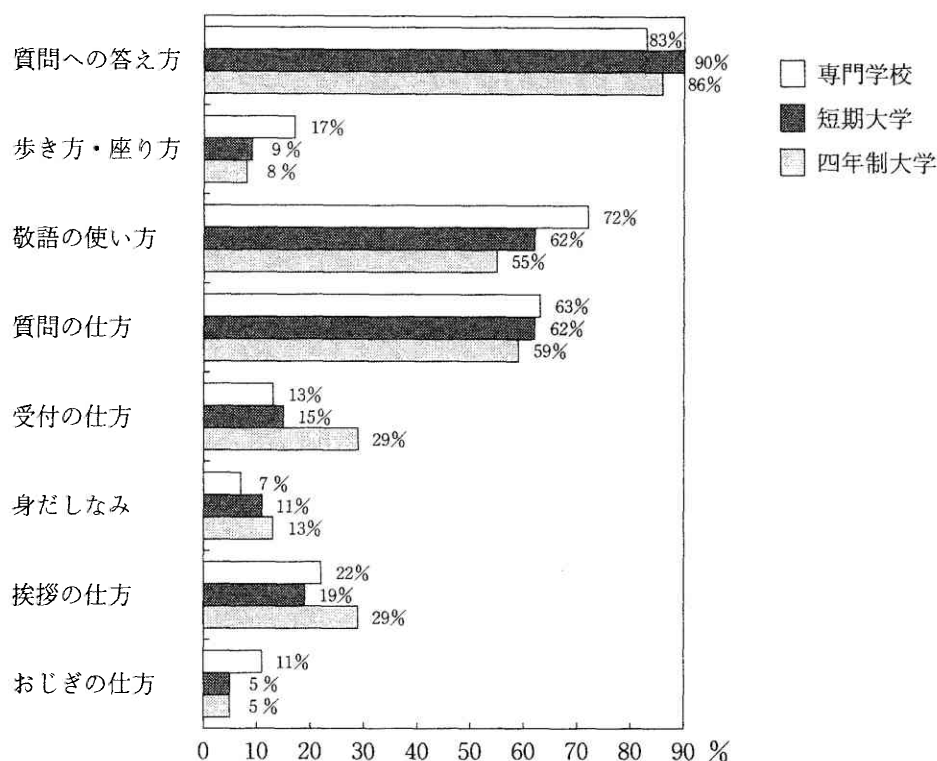


図8 面接試験に関して知りたい知識

各項目とも、4年制大学、短期大学、専門学校による差異が少なく、知りたい情報・知識の圧倒的第1位は、質問に対する答え方である。つまり、どのようなことを質問され、どのような言葉遣いで、どのような内容で答えるべきかを知りたいと希望している。話し方に自信がなく、日頃の言葉遣いが一般企業社会では良い評価が得られないことを承知しているのである。しかしながら、正しい言葉遣いとは一体どのようなものであるのか、社会人としての話し方、話す内容とはどのようなものなのか、正解を求めて指導を希望しているのである。第2位に敬語の使い方がランクされていることをみても良く判ることである。



る。また、第3位が質問の仕方と続いている。まさに話し方指導が、面接指導そのものとなる。その他の項目である、外見・動作などはかなり低い割合となっており、現在の学生は日頃からセンスの良い身だしなみであり、自分を美しく見せる方法は充分心得ているのである。つまり、表情や身だしなみなどの外見的なものや、態度・動作などには、自分としてのスタンスをもっているのである。

### (3)不安課題

「一番不安を抱えていること」をまとめてみると、共通していることは、当然ながら内定を得ることができるか否かである。これは特に大学生に顕著であり、続いて短期大学生となり、不思議と専門学校生には1名もいない。一つには前出したように在籍学生数の違いによる教職員の対応時間がある。しかし、学生自身の就職活動に対する意識の相違が大きく作用していると思われる。

続いての不安は前出の面接に関する不安と同じく、どのようにすれば良い答え方ができるのかということである。不安材料は内定を得ることができるか否かと、話し方の2点に絞られている。

### (4)分析結果

以上のデータを分析しまとめてみると、女子学生は、いずれも資格取得に関しまじめに取り組み、かなりの成果をあげている。これは学業努力の結果と、就職対策の準備と考えられる。

また、就職試験に関して四年生大学生は、資料請求や企業訪問等のプレ就職戦に対して重点を置き、短期大学生は面接に重点を置いている。専門学校生は他力本願的要素が多いことをうかがわせている。

これらのことによって、四年生大学生の就職指導は、資料請求を始める以前、つまり3年後期直後から就職活動前期向きの指導を行い、その内容は、書く、話すという実務を中心にすることが望まれる。

短期大学生においては、話し方、聞き方を中心に、より多く自己表現をする場を体験させることが必要である。

専門学校生においては、就職に対する自覚を促すべき方法、たとえば専門学校卒業生の成功例としての社会人を招聘しての講演や企業体験実習などを組み入れたものを考えていくのも一つの方法ではないだろうか。

いずれにしても、身だしなみや動作、挨拶、筆記対策等、従来第一段階で重要視して指導していた項目より、話し方という個別指導で、しかも長期間を要する就職対策が必要とされている現実が判明した。

### 3. 働く女性の環境と現状

以上のようなデータ結果の学生たちを対象に、どのような時期に、どのような内容の指導を行うと最も効果が上がり、かつ学生側の満足感を得られるかを、現在の就職環境、社会情勢などのデータをもとに考察してみる。

#### 3-1 データでみる労働市場

##### (1) 女性の就業状況

日本の経済は、バブル崩壊後の長期不景気から脱しつつあるといわれるものの、労働経済面では、求人倍率の低下や雇用者数の伸びの鈍化など、まだまだ厳しい状況が続いている。

そのような中でも女性全体の労働人口は、平成6年において2,694万人と前年比13万人増となっている。これは労働人口総数でみると40.5%である。

##### ① 年齢別

これらの女性雇用者数を年齢階級別にみると、最も多いのは20才～24才で332万人で、女性雇用者数の16.3%にあたる。第2位は45才～49才の267万人で13.1%となり、次いで40才～44才の261万人で12.8%となり第4位が25才～29才の246万人で12.1%となっている。

つまり20才～24才と、45才～49才層を左右の頂点とする、いわゆるM字型曲線を描く労働力となっている。（図9）

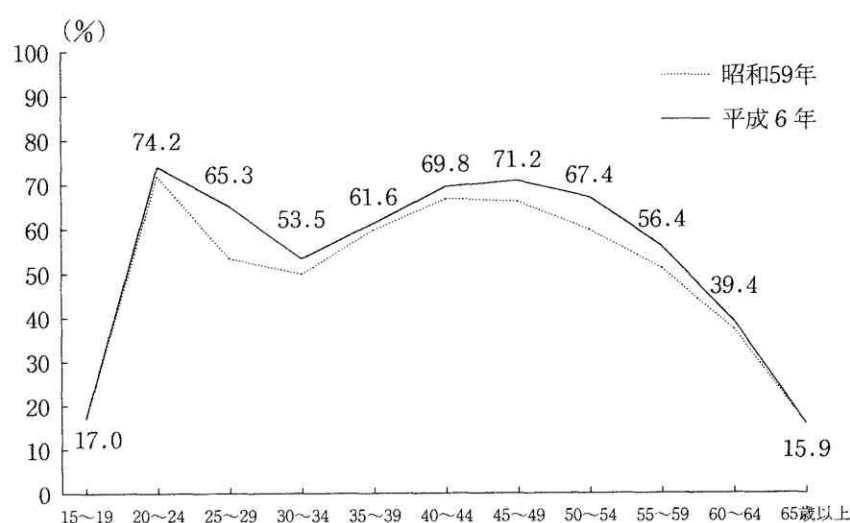


図9 年齢階級別女性の労働力率

## ②産業別状況

また、就業している業務を産業別にみると、サービス業が672万人と最も多い。これは女性雇用の33%となっている。次いで卸売・小売、飲食店が552万人で27.1%、製造業470万人・23.1%となっている。つまり女性雇用者の83.3%がこれら3産業に集中していることになる。

そしてこの傾向、とくにサービス産業での雇用増加が著しく、平成6年は前年比4%増となっている。反面製造業においては3.7%の減少がみられる。（図10）

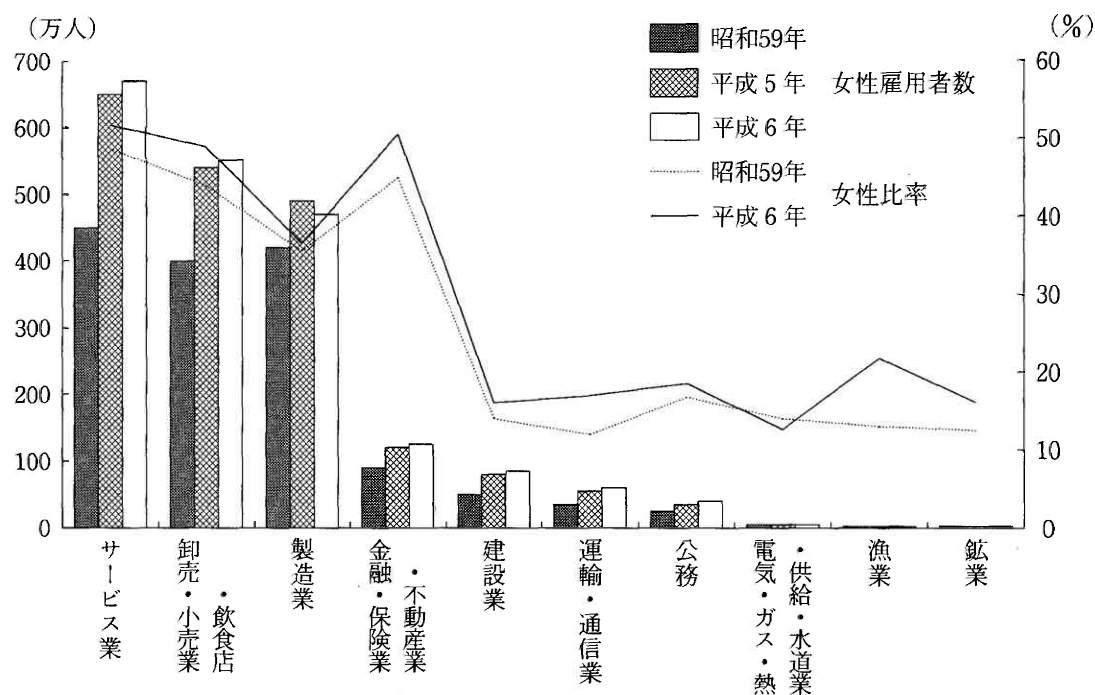


図10 産業別女性雇用者の増加状況及び女性比率

## ③職業別状況

一方、女性雇用者を職業別にみると、事務従事者が698万人で、女性雇用者数の34.3%となり、圧倒的多数を占めている。第2位以下は、技能、製造業374万人（18.4%）、専門的・技術的職業に従事している人で300万人（14.7%）、販売255万人（12.5%）、保安・サービス24万人（11.8%）となっている。

このうち最も増加傾向が強いのは、専門的・技術的職業に従事している人で9万人増（3.9%）となっている。

これらの職業のうち女性が男女合わせての全雇用者数の半数以上を占めているのは、事務の59.1%と保安・サービス業の52.5%である。

## 女子教育の場における就職指導

## ④学歴別状況

女性雇用者を学歴別に調査すると、高校卒が56.4%、高専・短大卒が22.5%、大卒7.4%となっている。

産業別にみると、高校卒では製造業が33.5%と最も多く、高専・短大卒や大卒ではサービス業に従事するものが44.1%、41.6%と最も多い。

また、企業別にみると、学歴が高くなるほど大規模な企業に雇用される割合が高く、大卒の約40%が1,000人以上の大企業に雇用されている。

## ⑤勤続年数

女性労働者の平均勤続年数は、平成6年において7.6年となっており、男性の12.8年に比べ、6割の長さになっている。

最も多いのが、勤続1～2年で23.0%、次いで5～9年で21.3%、となり、勤続10年以上が27.1%である。これは女性労働者の実に4人に1人が勤続10年以上となっていることである。

また、20年以上の長期勤続者は8.9%となり、前年比0.6%増となっている。

## ⑥新規学卒者の状況

このような女性の労働市場の中で、平成6年の新規学卒者の就業状況をみると、高校卒業者は83.4万人で就職者は21.6万人、就職率26%となっている。

短大卒業生数は22.8万人で、就職者は15万人、就職率66%となっている。就職率は平成4年に比べ16.1%の低下となっている。

大学卒業生数は15.9万人で就職者は9.9万人、就職率63.7%となっている。（表5・6）

表5 学歴別新規学卒就職者数の推移

	平成3年	平成4年	平成5年	平成6年	平成7年
短期大学卒	177,179	182,870	181,076	161,768	150,926
大 学 卒	98,582	103,082	103,026	98,865	101,278

表6 学歴別新規学卒就職率の推移

	平成3年	平成4年	平成5年	平成6年	平成7年
短期大学卒	88.0	86.8	80.8	70.7	66.0
大 学 卒	81.8	80.4	75.6	67.6	63.7

卒業したが常勤としての就職をしなかった者、つまり一時的な仕事（パート、アルバイトや派遣等）や無業者は短大卒で、卒業生の25.5%を占め、大卒では22.5%となっている。

（図11・12）

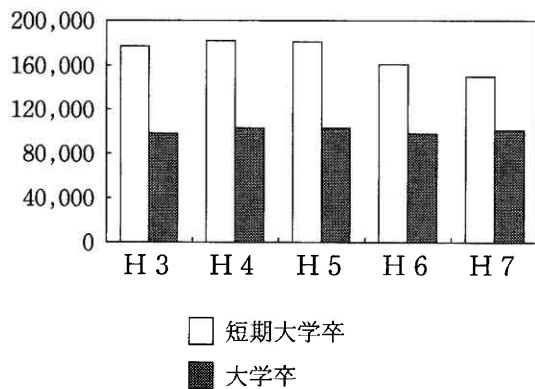


図11 学歴別新規学卒就職者数の推移

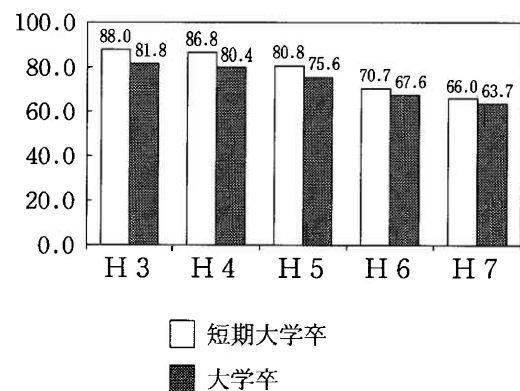


図12 学歴別新規学卒就職率の推移

産業別にみると、短大卒はサービス業が38%と最も多く、次いで卸売・小売・飲食店が18.2%、製造15.1%、金融・保健14.9%、となっている。前年に比べ製造と金融での割合が低下している。

大卒においては、サービス業36.7%、卸売・小売・飲食店17.7%、製造16.6%となっている。前年に比べサービス業と製造が低下し、卸売・小売・飲食店が上昇している。

これらのうち大卒者はその50.2%が産業別を問わず事務従事者となっている。（図13）

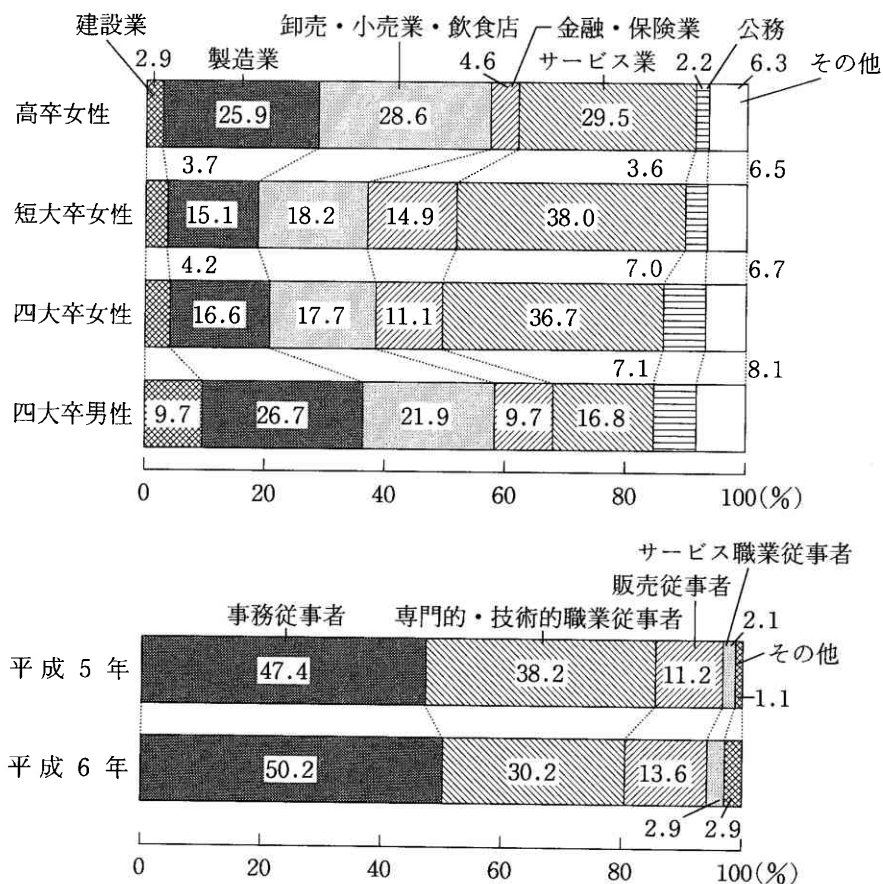


図13 産業別新規学卒就職者の割合

### ⑦賃金

女性労働者の賃金を、労働省「賃金構造基本統計調査」によってみると、常用女性労働者の平均賃金は所定内給与で20万3,000円である。これを学歴別にみると高卒19万1,600円、高専・短大19万6,200円、大卒23万9,400円となっている。この賃金は、高卒の場合50～54才で最高となり、37万6,400円、高専・短大卒は55～59才で50万5,300円、大卒55～59才で53万9,300円、となっている。

一方、女性の新卒者の初任給は、平成6年4月採用の統計によると、高卒14万5,500円、高専・短大15万7,700円、大卒事務系で18万2,500円となっている。

この初任給は、男性の初任給を100として同じ学歴で比較すると、高専・短大で94.7%、大卒事務系で95.6%となっている。

以上のように、平成6年、7年の女性就業内容、新卒者就職内容をみると、就職率や職種など非常に厳しいものがあるとともに、女性の高学歴化に伴う、職業の変化が感じられる。

## 3-2 職業選択にみる学生の労働意識

女子学生が職業選択を始めるときの職業意識と女性の高学歴化を合わせて考えることにより、今後の女性の職業構造をみることにする。

### (1)就職に際し考慮すること

女性が就職するとき、どのようなことにポイントを置いて、企業を選択するのかを日本生産性本部の調査からみる。（表7）

会社選択のポイントは、まず第1に「自分の能力、個性が生かせること」である。これは専門学校卒の28.8%大学卒の28.8%と短大卒が23.7%となっている。

業種別にみると、この「自分の能力、個性を生かす」のはサービス・外食等で28.2～33.1%と高く、逆に金融・保険業では8.6%と低い数字となっている。

つまり、同じ接客を主とした業務であっても、個人の感性、個性が表に出るサービス・外食業と、企業の枠組みの中で動く金融業界への目の向け方の相違であるといえる。

また、短大卒の数字がやや低いのは、事務職を希望し補助職としての存在を念頭においているため、自分自身の能力の発揮という強い意思が、大学、専門学校で学んだ人々との数値的相違となっているように思われる。

企業選択の要因第2位は「会社の将来性」で、これは専門学校、短大、大学といずれも差は少なく、共に21%～23%である。続いて第3位「給料が高い」、第4位「技術が覚えられる」、第5位「地理的条件」となっている。

表7 会社を選ぶとき、あなたはどのような要因を最も重視しましたか

	学 歴 別						
	高専卒	短大卒	大学卒	大学院卒	専修学校卒	各種学校卒	その他
自分の能力・個性が生かせるから	25.3	23.7	28.8	39.8	28.8	27.3	41.7
給料が高いから	8.9	4.4	2.1	1.2	3.1	8.2	4.2
仕事がおもしろそうだから	6.3	9.2	13.8	14.5	6.9	6.2	4.2
技術が覚えられるから	8.9	3.5	8.5	6.0	12.4	14.9	4.2
会社の将来性を考えて	20.3	24.6	23.1	10.8	21.2	16.5	25.0
一流会社だから	1.3	1.3	1.0		1.0	0.5	
実力主義の会社だから	1.3	3.1	5.2	3.6	4.5	3.6	4.2
経営者に魅力を感じたから		1.3	2.4	2.4	2.7	1.0	
労働時間が短く休日が多いから	1.3	0.9	1.0		2.9	2.1	
寮・グラウンドなど 厚生施設が充実しているから	3.8	2.6	0.5		1.8	2.1	
地理的条件がいいから	3.8	7.9	3.3	8.4	4.7	4.6	
先輩が多いから		0.9	0.3				
どこへも行くとこがなくやむなく	6.3	2.2	3.0	3.6	2.2	3.6	12.5
その他	12.7	14.5	6.7	9.6	7.8	8.8	4.2

## (2)就職に際して誰の意思を尊重したか

平成7年度の新規卒業者に対する日本生産性本部の調査によると、就職を決定するにあたって、約79%の人が自分の意思と答え、次いで14%で学校の先生、先輩となっている。肉親や知人、友人などは、それぞれわずか1%である。やはり学校の影響力はかなり大きいといえる。

## (3)希望する職種

女子学生が就職したいと希望する職種について、リクルートリサーチが平成7年3月卒業の女子学生を対象に調査した「就職実体調査」に基づいて考察する。（図14）

まず短大生は「事務職」希望が41.9%で、しかも「事務職以外の職種は考えなかった」という学生が実に25.7%にもなっている。

現実に求人の多い営業や販売、接客サービス等に就いても良いと考える学生が35～40%しかないということになる。

4年制女子大学制はさすがに求人難の市場を考慮しているのか、短大生のように「事務職」にこだわらず「営業」「販売」「サービス」も広くターゲットに入れ、その数値は60～40%となっている。事務職に就きたいが自分らしく働ける営業、販売等にも目を向け、まず「就職」ということに的をしぼっている感がある。

## 女子教育の場における就職指導

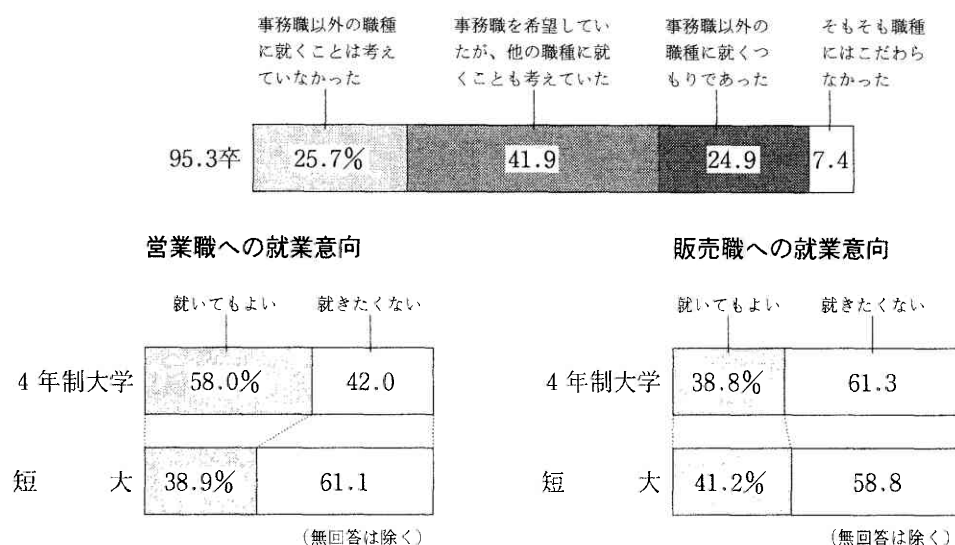


図14 事務職以外の職種への就業意向

また、就職したいと希望する企業規模も、就職活動当初は「大手を希望している」と答えた短大生が46.3%、大学生が44.8%となっており、職種や企業規模においてかなり現実と比べ甘い判断と夢を抱いていることがわかる。(図15)

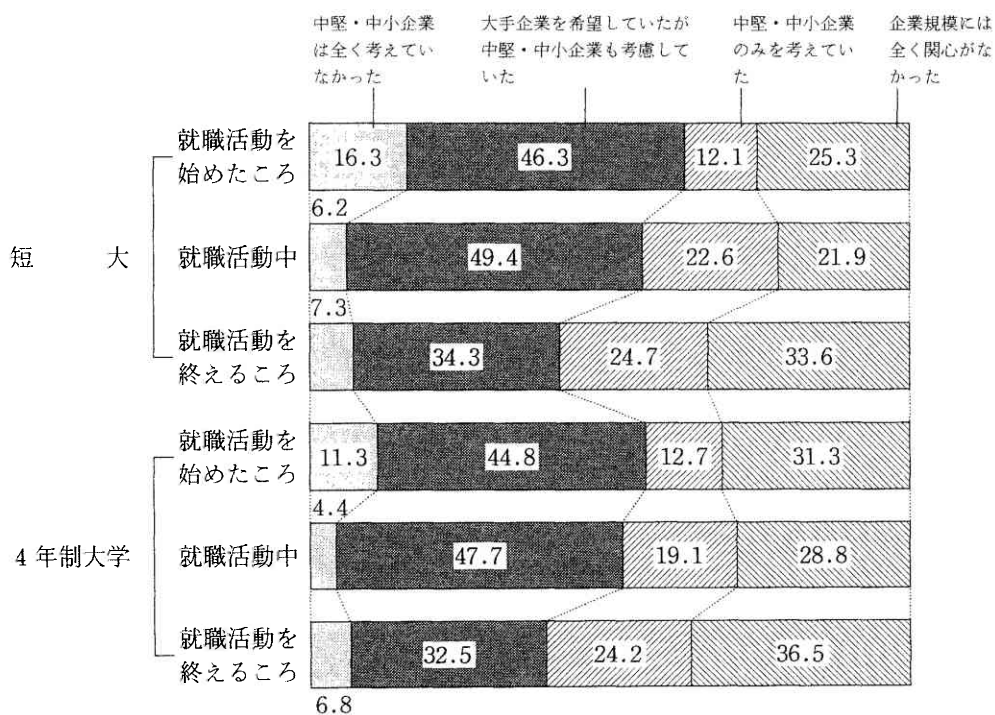


図15 中堅・中小企業への就職意向



#### (4)労働力の今後の見通し

では、学生の希望する大企業における今後の労働力のニーズはどのようなものかを、労働省雇用政策研究会のデータに基づいてみる。（図16・17）

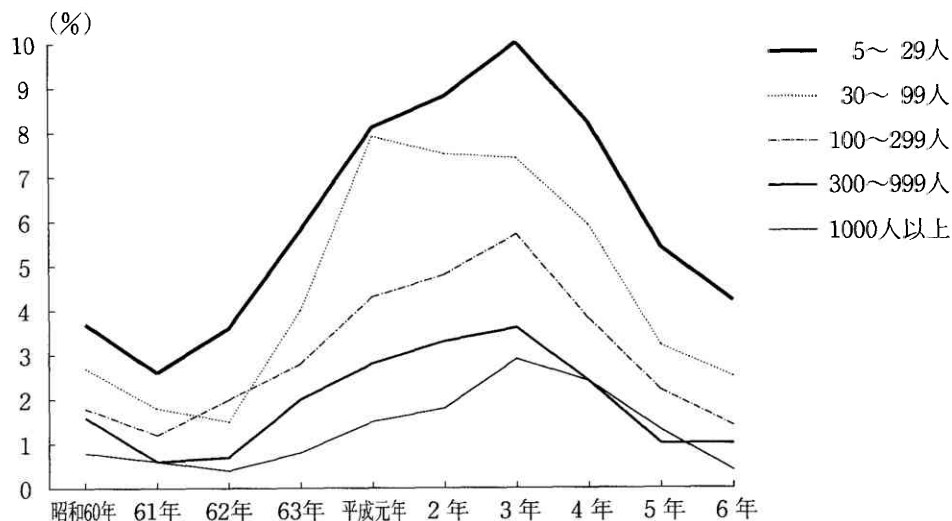


図16 企業規模別欠員率の推移

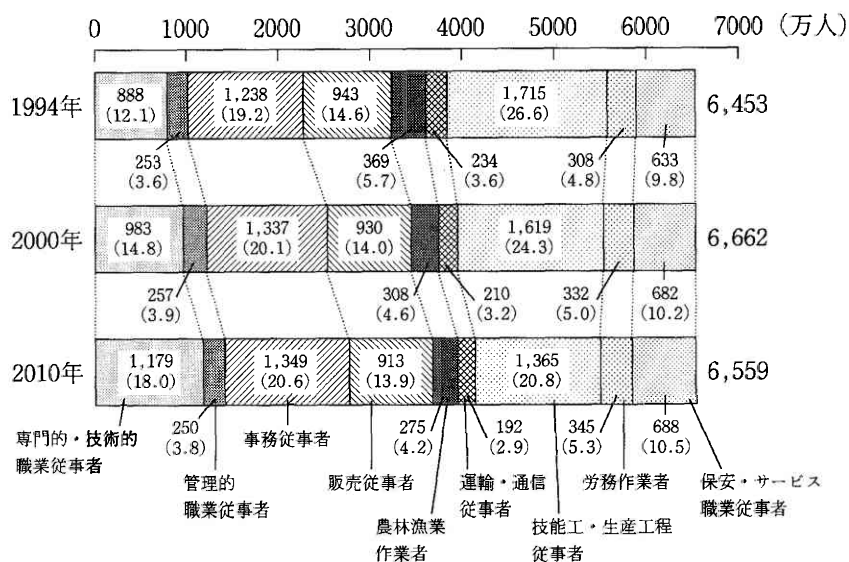


図17 職業別就業者の見通し

まず企業規模別にみると、1,000人以上の企業において欠員率は、平成5年以来1％を越えたことはない。しかも事務従事者の欠員率は年々低くなる一方である。専門・技術的従事者や販売・サービス従事者での欠員率が高くなっている。これらの欠員率の高い職業の中で、専門・技術的職業従事者は今後も引き続き労働力需要が見込まれる。一方、現在欠員率の高い販売は、需要が低下すると思われる。なお、事務・サービス・運輸・通信等における需要は、ほぼ横ばいの状態が続くものと推測されている。

## 女子教育の場における就職指導

以上のような環境を考え合わせると、今後は大企業の求人や、事務職としての採用等、最も女子学生が希望する就業形態においてはますます厳しくなっていくものと考えられる。しかも、結婚・出産による退職が減少していることや勤続年数の延び等を考慮すると、退職者補充の形をとっていた新卒定期大量採用は望み薄となる。そこで就職ガイダンスにおいて職業知識の拡大を図り、新たな職域に目を向けチャレンジする力を呼び起こす必要がある。（表８・９）

表８ 平成６年 女子新規学卒者企業規模、学歴別入職者数及び構成比

		５～２９人	３０～９９人	１００～２９９人	３００～９９９人	１,０００人以上	計
入 職 者 数	短 大 卒	36.2	34.5	28.4	28.7	43.8	177.2
	大 学 卒	9.8	8.5	13.6	11.5	24.0	68.8
構 成 比	短 大 卒	20.4	19.5	16.0	16.2	24.7	100.0
	大 学 卒	14.2	12.4	19.8	16.7	34.9	100.0

表９ 平成７年度 規模、採用区分、新規学卒採用ありの企業における女子の新規学卒者採用の有無別企業割合

	4 年制大卒以上					短 大 卒					専 門 学 校 卒						
	採 用 ありの 企業計	事務営業系		技 術 系		採 用 ありの 企業計	事務営業系		採 用 ありの 企業計	技 術 系		採 用 ありの 企業計	事務営業系		採 用 ありの 企業計	技 術 系	
		採用あり	採用なし	採用あり	採用なし		採用あり	採用なし		採用あり	採用なし		採用あり	採用なし		採用あり	採用なし
合 計	[814社] 100.0	72.2	27.8	40.8	59.2	[515社] 100.0	98.6	1.4	[226社] 100.0	31.0	69.0	[184社] 100.0	79.3	20.7	[147社] 100.0	29.9	70.1
5,000人以上	100.0	86.1	13.9	59.5	40.5	100.0	100.0		100.0	37.5	62.5	100.0	90.3	9.7	100.0	44.0	56.0
1,000～4,999人	100.0	77.7	22.3	43.9	56.1	100.0	98.5	1.5	100.0	31.0	69.0	100.0	82.1	17.9	100.0	26.1	73.9
300～999人	100.0	55.2	44.8	27.1	72.9	100.0	98.3	1.7	100.0	24.1	75.9	100.0	68.3	31.7	100.0	27.1	72.9
299人以下	100.0	48.7	51.3	16.7	83.3	100.0	94.7	5.3	100.0	33.3	66.7	100.0	50.0	50.0	100.0	40.0	60.0

## ４．まとめ

「経済大国日本」の中で、景気の動向によって雇用状況に大きな影響を受ける弱者として、クローズアップされているのが女性である。その中で社会的経験も少なく、企業社会に対する免疫や情報も少ない女子学生に対して行う就職指導には、まず人生という長い道のりにおける仕事の重さを認識させる必要がある。最も重要なことは、イメージや不確定な情報に惑わされることなく、自分自身の適性と興味をしっかりと見つめることの大切さをいろいろな切り口から指導することである。

なぜなら学生たちは、ともすると目先の内定という結果にのみ固執したり、古い幻影を抱いたまま就職戦線を走るからである。

たとえば、どのような職種に適しているのかを学生自身のタイプから分析させる。そのためにはタイプ分けをするための材料を集めさせなければならない。

身体的な分け方、性格による分け方、知識量、運動能力、価値観、趣味等である。つまり、声が美しいとか、背が高いとか、反射神経が優れているなどとチェックしていくと、以外と希望する職種との適性が明らかになる。また、おしゃれが好きとか、ショッピングが好きとなれば、スタイリストやハウスマヌカンという専門職が考えられる。正義感が強いので銀行、行政に行きたいと考える学生も現れるであろう。このように適性や興味によって自分を見つめることで簡単に適職が見えてくるのである。それがいち早く内定に結びつく、仕事との相性だと考えられる。好きなこと、興味を持っていることに対しては、ある程度の知識や情報、そして意欲というものがある。したがって、その業界の常識としての筆記試験も一定レベルはできるであろうし、面接時における会話にも生き生きとしたものが現れると思う。これは好感度の表現となるのである。

「どこへ就職するのか」ではなく、「何をするのか」を考えさせるのである。そのうえで、自分のしたい仕事、能力を発揮できるところ、興味を持ち続けられる対象としての企業を見つける基準を示すのである。

たとえば、上昇志向のキャリアウーマンをめざす学生には、華やかな看板女性役員のいるところより、女性の課長、係長の多い企業が良いことや、結婚後も働きたいと考える学生には30代のワーキングマザーのいる会社の情報を伝え、社会性、正義等を考える学生には、社会貢献度の高い企業をという具合である。

このように、はっきりとした感覚のない学生の場合でも、女性の平均勤続年数が長く、女性ばかりが偏った課にいたことがなく、コース別人事制度なる見せ掛けの平等ではなく、研修や女性の出張、会議出席が日常化している企業が働きやすい企業であることを伝えるべきである。

このような至極あたりまえの情報に学生は頷き、安心をするのである。授業と異なり、就職指導にはそれぞれの限界があると思われるが、少しでも多くの情報と、広い視野を持った柔軟な対応を示すことが望まれる。そして学生たちが社会へのスタートを、出来るかぎり満足のいくものとなるよう、適性選びと表現方法を指導しながら、タイミング良く「声掛け」をしていくことが、不安を抱きながらも精一杯走りつづける就職戦線の学生への最良の指導となるのではないだろうか。

## 女子の就職に関するアンケート

実施日 平成 年 月 日

お答えいただく貴女ご自身についておたずねいたします。該当する項目に○印をご記入下さい。

1. 現在在学されている学校について  
( 四年制大学 ・ 短期大学 ・ 専門学校 )
2. 現在のご住所について  
( 自宅 ・ 下宿 )
3. 就職を経験済みのご兄弟について  
( 有 ・ 無 )
4. アルバイトについて  
( 事務 ・ サービス ・ 経験なし )
5. 専攻学科について  
( 文学系 ・ 語学系 ・ 経営系 ・ 情報系 ・ 秘書系 ・ 家政系 )
6. 現在お持ちの資格について  
秘書検定 ・ ビジネス文書検定 ・ ペン字 ・ 書道 ・ ワープロ検定 ・ 簿記  
タイプ ・ 情報処理 ・ 英語検定 ・ TOEIC ・ TOEFL ・ 珠算

現在あなたが知りたいと思われる就職情報についておたずねいたします。

1～3それぞれについて該当する項目3つに○印をご記入下さい。

1. 全体的な手順について
 

就職ガイダンスの内容	( )	就職活動の手順	( )
セミナーとは	( )	資料請求とは	( )
企業訪問とは	( )	就職登録とは	( )
内定とは	( )	適性検査とは	( )
一般知識とは	( )	面接試験とは	( )
簿記試験とは	( )	業種・職種とは	( )
学校推薦とは	( )		
2. 就職活動をするうえで知りたい知識について
 

服装・身だしなみ	( )	電話の掛け方	( )	持参物	( )
面接のシュミレーション	( )	時事用語	( )	資料請求の仕方	( )
履歴書の書き方	( )	封筒の書き方	( )	令状の書き方	( )
断り状の書き方	( )	内諾書の書き方	( )	論・作文の書き方	( )
適性問題	( )	数理的問題	( )	国語的問題	( )
英語問題	( )	S P I 問題	( )		

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第16号（1996年）

3. 面接試験について

おじぎの仕方（ ） 受付の仕方（ ） 歩き方・座り方（ ）  
挨拶の仕方（ ） 質問の仕方（ ） 質問に対する答え方（ ）  
身だしなみ（ ） 敬語の使い方（ ）

4. 現在一番不安を抱えていることをお書き下さい。

最後までご協力いただき、ありがとうございました。

参考資料

- 1) (財) 21世紀職業財団 「新規学卒採用内定等調査」1995
- 2) (財) 社会経済生産性本部 「新入社員働くことの意識調査」1995
- 3) (財) 日本経済青年協議会 「新入社員働くことの意識調査」1995
- 4) リクルートリサーチ 「高校生の就職動機調査1994」
- 5) リクルートリサーチ 「短大女子学生の就職実態調査'95」
- 6) リクルートリサーチ 「4年制大学の就職実態調査'95」
- 7) 労働省 「雇用動向調査」1995
- 8) 文部省 「学校基本調査」1994・1995
- 9) 総務庁統計局 「労働力調査」1994
- 10) 労働省婦人局 「働く女性の実情」1995